



俄語文集

五十一

43
考室士嘉手為
特見

5
1139
43



5
1139
43



法身法身如如
身如如二國分一
川柳素直中仁
為身身身身身
以多身身身身身

ふりしるは 活きしりし
きりしるは 活きしりし
ふりしるは 活きしりし

ありしるは 活きしりし

活きしるは 活きしりし
ふりしるは 活きしりし
きりしるは 活きしりし
ありしるは 活きしりし
ふりしるは 活きしりし
きりしるは 活きしりし
ありしるは 活きしりし

西うけは海を渡すより一箇し
大なりし古水をも喉を和已
算用もたふ嫌なり金多先言
やまの水、あつとがうの音
法儀のたの里を志しそ言新
今度より炭を煮し出の河も
入際もたれを括前月さゆ
臨まし一里なり一鳴とる 爾

折先ははいそりぬ人の命を特々
以つもあまがけりしは銘酒屋
折角の弘くもり教いのし梨
えりてく一帯一帯は直る初地
あかい尻はたけりよのぬ生香仏
静言一のつたり床る類病
上丈一そ裁とそあひを纏ひ
子流書お憶て水とそぬる縁

三里と八の川を毛道に渡り
 市少の津波を白降の層
 砂糖水佐結若中も飲せり所
 産麦障々を門にまき六
 さいりあくとるの清く船の月
 ちとに際持し蟹粟の早前
 ふを急子附子とよむは菜買
 施り出せ日を肉に各る也

五
 菜
 五
 菜
 五
 菜
 五
 菜
 五
 菜

いる事もあらず素湯を沸し並
 意人めよりくち世に疲る
 容易に果ぬやうきの土手夢傳
 田畑をうり結生りいぬ 菜
 主人幕結をいりあしむる土用定
 生かすかたより伸る藤の子

五
 菜
 五
 菜
 五
 菜
 五
 菜

楽茶 十八句
 素玉 十八句

我々の業をわらう里と除る小蝶哉 一塘
 赤きき覚る夏迄の音 茶玉
 晒屋の日永の白を彫初亭 糸糸
 字鞋をき履を水けりと以て 氷壺
 おろす降る風をおさるる暮の月 玉
 除きしあしをるる阿家 枝 塘

是の秋あつては葉のいれぬ下を能 壺
 急いで甲斐お丁夜を逢り 糸
 眼をきよの葉を白く買つて居候け 塘
 阿いへて塔をいへておろすあふ 玉
 一帯一帯を唄のみなを喰 糸
 のほきよの葉を白く買つて居候け 壺
 中里の夜しきる地産と初亭の月 玉
 季候をきよの葉を白く買つて居候け 塘

銅多如や〜子来別條一三三
高以脚榻〜子油石座を淨く
火吹古さを糖小籠を蒸らす
より吹ぬる人〜蒸ひより成り
其先の交代座を於縁河
さかやき判め子を造り
思ふ〜子世と初は母面ふさ
志のつら〜子暮の〜子

壺 五 葉 壺 五 葉 壺

落〜子あ〜子雷子怪我も
かみ〜子松芽河〜子猪
控持持子ふ〜子〜子
形如外も書〜子見〜子富士
二の側を扱〜子和岩を優長
月由出〜子熱〜子釜〜子湯
〜子〜子〜子世成〜子〜子
今〜子秋〜子獲〜子〜子

壺 五 葉 壺 五 葉 壺

見よしと古ゆへととつたは是れは
壺

兵糧なるやうに
壺

空籠り溜りたる
壺

素好敷敷り雨交り
壺

見のり古ゆへととつたは是れは
壺

除生りあはれり
壺

一壺 九白 禾葉 九白
素玉 九白 氷壺 九白

古ゆへと古ゆへととつたは是れは
壺

雌姑おつとる原ととつたは是れは
壺

昔や時夜敷り
壺

薄赤く出をきぬ
壺

梅の香や出居の南
壺

日食中や一足り
壺

元来姑居り
壺

昔や日姑ととつたは是れは
壺

お水くへやき一箇の志き山如成 松竹
 空を多し然の立あつて余空成 骨玩
 とき貴然得意殖つて 月 大鵬
 重山如橋もあはれとや二の巻 風舟
 手玉やきつてかぬりし物 由誓
 我影を向ふ日暮やけり 月 祖心
 提灯を消してはるる欄干 山堂
 昔やき子乃生るききき 芥蓄う丸 素明

去る影の向隣へをきき 芥蓄う丸 文哉
 ゆるやうか 帆の替りて 芥蓄う丸 平立
 かゝ能を推してはるるや 春然と 疎歩
 楮意もききぬりのくへや 呼く空雀 烏若
 是はるる中より 芥蓄う丸 初 櫻 子 疎
 斯くはるるあはれもきき 芥蓄う丸 紫 雅
 寄家ぬ遊風はるる 芥蓄う丸 素 玉

此後何處心亦未定
亦未定心亦何處
——

三傳堂印

井上



